

学校図書館を活用した「読み」を鍛える拠点校事業 実践記録

研究主題

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善
～特別支援教育を視点においた「分かる・できる」授業づくり～

いの町立伊野南小学校

実践概要：

学校図書館を活用した「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け、授業改善を進めてきた。特に、言語活動の充実を図ること、少人数による話し合い活動を工夫すること、特別支援教育の視点に立った授業づくりを進めることに重点を置き、「読み」の力を培ってきた。その結果、児童が目的をもって主体的に読む力が付き、読解力の向上につながっている。

キーワード： 主体的・対話的で深い学びとなる授業の展開（つなぎ言葉の使用）、言語活動の充実、語彙力の向上（MIM・国語辞典の活用）、学校図書館を活用した情報活用能力の育成、図書館資料の活用言語活動の充実、図書館資料の活用

1. 研究仮説

特別支援教育の視点に立った「児童一人一人がより深い学びとなるような授業実践」を行えば、支援を要する児童にとっても「分かる・できる」授業となるだろう。そのために、以下の4点を意識して授業改善を図っていく。

2. 実践方法

(1) 「つなぎ言葉」を使った話し合い活動の活性化。

○少人数による話し合いのある授業づくり

児童同士が考えや意見等を述べ合う際に「つなぎ言葉」を意識して使い、友達の意見に対して主体的に関わり合うとする対話が生み出される授業を教師が仕組んでいく。

(2) 低学年ではMIMの活用を、中・高学年では国語辞典を活用した語彙力の育成。

① 多層指導モデルMIMの活用

読解力向上へとつなげるために多層指導モデルMIMを活用した「読み」のアセスメント・指導を年間30時間行い、文字や言葉を正確に素早く読む力を育む。

② 国語辞典の活用

各教科等で国語辞典を必要に応じて活用し、語彙の習得に努める。

(3) 学校図書館が「学習センター、情報センター、読書センター、資料センター、居場所」としての機能を果たせるように、いの町立図書館と連携を図った図書館環境の整備。

① 学校図書館活用の充実

学校図書館・新聞活用年間計画に沿って、推進教諭が中心となり、各学年の学習活動を充実させる。また、いの町立図書館と連携を図り、図書館の活用の仕方や学習資料の充実を図る。

② 委員会活動の活性化

図書委員会で、辞書引き大会や百人一首大会などイベントを開催し、図書委員会の活性化を図る。

(4) 国語科の授業では、単元を通して児童に付けたい力を教師自身が明確にもち、図書館資料や新聞を活用した授業の実践を行う。

○国語科を中心とした情報活用能力の育成を目指した授業研究

単元のゴールを明確にする。（1つの単元の中で児童に付けたい力を教師自身が明確にもつこと。）そのゴールへ向かうために、付けたい力に最適で、児童にとって魅力的な言語活動を位置付け、それを通して教材研究をする。並行読書や調べ学習、新聞を使った授業などをする際には、学校図書館を活用し、情報の中から取捨選択する力や自分の意見を文章にまとめる力などを育成する授業を行う。

3. 実践内容

(1) 少人数による話し合いのある授業づくり

・何のために話し合いをするのか、話し合いをすることによってどんな学びが児童に見られるのか（単なる話し合い活動を行うだけの授業にならない）という視点を常に意識して授業を構成していくように共通理解を図ってきた。授業の中で児童が、仲間と言葉でつながりながら主体的に取り組めるように、「つなぎ言葉」を意識して使わせた。国語科だけでなく他教科等においても「伊野南小授業スタンダード」を基にして授業を行い、児童にとって主体的・対話的で深い学びとなる1時間を目指して、対話に力を入れて取り組んできた。教師は児童の学びが確かなものとなるように、意図的に話し合い活動を仕

組み児童同士の対話の中で思考が深まる授業を目指している。また、授業の終わりには、振り返りを書かせたり授業アンケートを活用したりするなどして、授業後に自分自身が「何が分かったのか」そして、「何ができるようになったのか」を明確に振り返らせるようにし、これまでの学習のつながりや学習を通して使えるようになったことなどが、児童自身が認識できるようにした。対話の方法については、兵庫県たつの市立新宮小学校の石堂裕主幹教諭から「対話がしやすくなる座席配置の仕方」や教師が授業をマネジメントしながら児童に対話力を付ける手法についてアドバイスいただき実践してきた。

(2) 語彙力の育成

- ・多層指導モデルMIMを活用した言語聴覚士による「読み」のアセスメント・指導を2年間(年間11回の個別指導)行った。年度初めは教員の入れ替わりもあり、研修の場を設けた。対象を低学年に絞り、児童の実態に合わせて個別やグループで指導したことで、自分の課題を克服しようと意欲的に取り組む児童の姿が見えた。また、「書かれている内容を正確に読み取る力」に課題が見られるため、各教科等で必要に応じて国語辞典を活用する(3~6年生対象)ように取り組んだ。調べ学習等で分からない言葉を自ら調べ、理解しようとする児童の姿が見られるようになってきた。また、図書委員会とタイアップし、年に3回の辞書引き大会(3~6年生対象)を行い、日常的に辞書と触れ合う機会を設け、語彙力の向上に努めた。

(3) 学校図書館活用の充実

- ・今年度、学校図書館が「学習センター、情報センター」「読書センター」「資料センター」「居場所」としての機能があることを教職員で確認し、夏季休業を利用して図書館の環境整備に着手した。まず、学習室とオープンスペースに分かれて配架されていた本を、国語の教科書に掲載されている学校図書館の様子や、公共図書館の配置を参考に本を配置した。そして、内容の古くなった本や衛生的に問題のある本を除き、開架に置く本と資料センター配置の本とに分け、絵シール分類を中心とした配架を、NDC分類中心のものに変更した。整備された図書館環境の中で、赤木かん子さんの紙芝居で「本の成り立ち」や「目次と索引」「百科事典の使い方」「テーマの決め方」などの学校図書館を活用した学び方の授業や、情報活用能力を育成するための授業を行った。また、高知新聞社「読もっかNIE編集部」高本浩史さんを招聘し、はがき新聞や新聞の書き方の授業を実施し、実際の調べ学習等で活用できるように取り組んだ。

(4) 国語科を中心とした情報活用能力の育成を目指した授業研究

- ・教材研究を全教職員で行うために、指導案を書

く前に「国語科授業づくり講座」で研修したトラック図を作る活動に低・中・高ブロックに分かれて取り組んだ。事前に全員で考えることで、児童に付けたい力は何か、教師が指導する指導事項は何か、児童が言語活動を遂行するために、どんな力が必要かを明確にもつことができた。公開授業の事後協議でも、2つの視点

①児童に付けたい力を付けるための手だては有効であったか。②児童に付けたい力を付けるために、主体的・対話的で深い学びの姿はどこで見られたか)で授業を分析し、次の授業者は、事後協議で出た課題に重点を置いて改善し、全教員で取り組むようにした。また、授業の際には、児童が見通しをもって取り組むことができるように単元マップを作成した。児童が言語活動を行う際に、この単元マップを活用しながら学習したことを振り返ることができるので、児童が行う言語活動の際に大変有効であった。

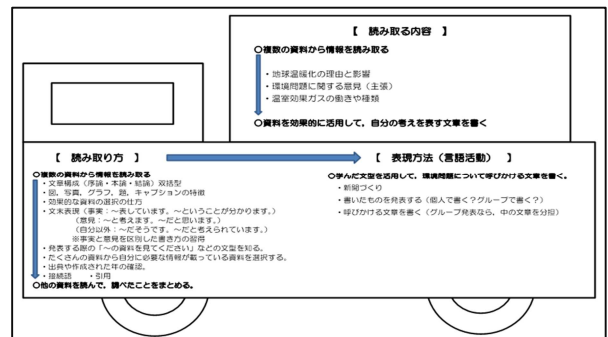


図1 トラック図

【単元名】環境について呼びかける文章を書こう
 学習教材:「資料を生かして呼びかけよう」
 (6年 東京書籍)



写真1 単元マップ

【単元名】君も新聞記者になれる!
 学習教材:「新聞記事を読み比べよう」
 (5年 東京書籍)



写真1 授業の様子

4. 成果と課題

(1) 検証

指標	達成目標	検証結果
全国学力・学習状況調査国語	全国平均以上	6年国語 全国平均よりも若干下回っている
高知県学力定着状況調査国語	高知県平均以上	4年国語 高知県平均よりも若干下回っている 5年国語 +7.7P
児童の学校図書館利用率	85%以上	授業での図書資料の活用：75% 授業以外での利用：85%
授業力チェックシート	年度当初より5%アップ	【教師】 ・教材研究 (±0) ・授業構成 (±0) ・指導技術 (-2.5%) ・児童理解 (+2.5%) ※全てにおいて5%アップはできなかった。年度当初より下がっている項目が多い。 【児童】 ・教材研究 (+7%) ・授業構成 (+2.5%) ・指導技術 (+7%) ・児童理解 (+2.5%) ※全てにおいて5%アップはできなかったが、年度当初より上がっている。

表1 検証結果

(2) 成果

- 国語科で授業づくりをする際には、「教師がまずゴールイメージをしっかりともち単元計画を組み立てることが大切である」を基本に取り組んだ。授業では、単元マップを作成し、それに基づき指導することで、児童が学習の見通しをもち主体的に学習に取り組むことができるようになってきた。課題の大きかった「読むこと」については、全国学力・学習状況調査において(+1.1P)、高知県学力定着状況調査において4年生は高知県の平均に若干届かなかった。しかし、結果から国語科を中心に2年間実践を積むことで、読む能力の向上が見られ始めている。今後もこの2年間の実践を継続して取り組んでいきたい。
- MIMに取り組んでいる低学年担任に、効果を問う調査を実施した。「MIMに取り組むことで児童の姿に変化を感じるか」という問いに対して、「効果をまあまあ感じる」との回答が多く、下記の理由が挙げられていた。

- ・誤字が少なくなってきたように思う。
- ・普段の作文や日記から効果を感じる。
- ・個人差はあるが、以前に比べると、音読でつまることが少なくなったように感じる。

以上のことから、低学年には語彙力の向上にMIMは効果的であると考えられる。今後も継続して取り組んでいきたい。また3年生以上は必要に応じて授業で国語辞典を活用してきた。正確に文章の意味を捉えることが苦手な児童が多いので、言葉の意味を調べる習慣

が随分と身に付いてきたように思う。学校図書館で調べ学習を行う際にも漢字辞典や国語辞典を使い、文章の意味理解に役立っている児童も多い。今後も語彙力の向上に活用し続けていきたい。



写真3 授業の様子(国語辞典の活用)

- 2学期に入り学校図書館で講師を招いた新聞の授業や図書館の本の分類、調べるための基礎学習の授業を実施することで、児童の知的好奇心が少しずつ高まっているように感じる。配架を変更し、NDC分類を中心とすることで児童も教師も本の検索が容易になった。これは、各教科等で調べたいものを自ら探し出せることにつながる。図書館アンケートからもほとんどの児童が、「図書館が整備されて気持ちがいい」や「図書館で学習ができるようになった」「本が分類ごとに並べられているので分かりやすい」と感じていることが分かった。これは、図書館整備を行った大きな成果の一つなので、これからも一層の充実を図っていきたい。また、調べるための基礎学習の授業や講師を招聘してはがき新聞や新聞の書き方についての授業を基にして、国語科や総合的な学習の時間、社会科など他教科等において図書館を使用して授業を行う学年が増えた。児童たちの学習に必要な図書資料が不足している場合は、いの町立図書館と連携を図り資料の提供にも助力いただいた。地域の図書館と連携しながら調べ学習に取り組むことができ、児童の情報活用能力の育成に大いに役立った。いの町立図書館から「本との出会い推進事業推進員」が週2回児童の読書生活を広げるために来校していることも、本校の児童にとってプラスに働いている。

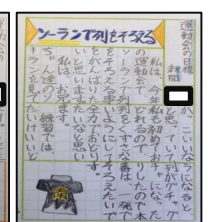
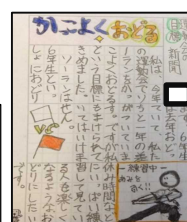
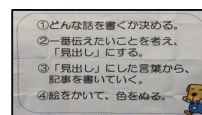


写真4 はがき新聞づくり

	(1) 授業の中 で本や資料を使う	(2) 授業以外 で図書館 へ行く	(3) 本を読む ことが好き	(4) 一日の中 で30分 以上読書 をする
H30年度	77%	74%	70%	59%
R元年度	85%	75%	94%	40%
差	+8P	+1P	+24P	-19P

表2 図書館アンケート（2年間の比較）

2年間の図書館アンケートの結果からも分かるように、(1)～(3)の項目全てがプラスの傾向にある。これも、図書館を整備し授業等での活用が進み始めた成果といえる。(4)の項目に関しては、学校生活で外遊びをしたい児童や放課後に塾等の習い事に行く児童が多く、読書をする時間が取りにくいという現状からこのような結果となっている。

(3) 今年度の課題

- 前年度に引き続き、全国学力・学習状況調査から「二つの文を比較して読んだり（前後の文の意味を理解しながら読む）書いたりすること」「漢字の読み・書き」に課題があることが明らかとなった。書く能力、漢字の読み書き、文に課題があると考えられるので、国語科で取り組んでいるように、リーフレットづくりや新聞づくりなど書く活動を入れた言語活動を設定し、今後も継続的に取り組んでいくことが必要である。また、漢字の読み書きに関しては、スキルアップタイムの時間（朝学習）や授業中のノート指導等を利用して、年間を通して定着を図っていくことが必要である。
- 授業の中で児童同士が言葉でつながりながら主体的に取り組めるように「つなぎ言葉」を使った展開を意識した。また、語彙力の向上を目指し3～6年生は各教科等で必要に応じて「国語辞典の活用」に取り組んできた。研究進捗状況調査を教員に実施し、9月上旬の調査と比較してみると、「つなぎ言葉」や「国語辞典」は各学年で活用されるようになってきているが、まだまだ十分とは言えない。特に「つなぎ言葉」の活用に関しては、約半数の学級があまり使用できていないという実態がある。教員から下記の理由が挙げられていた。

- ▼授業の際、「つなぎ言葉」を使った発表の仕方を十分に指導できていないから。
- ▼友達の発表をつなぐというよりも、自分の意見を発表したいという気持ちが強く、児童たちが言葉でうまくつながることができていないから。
- ▼聞くことに課題がある児童が多く、「つなぎ言葉」を使って意見交流するまでに至っていないから。

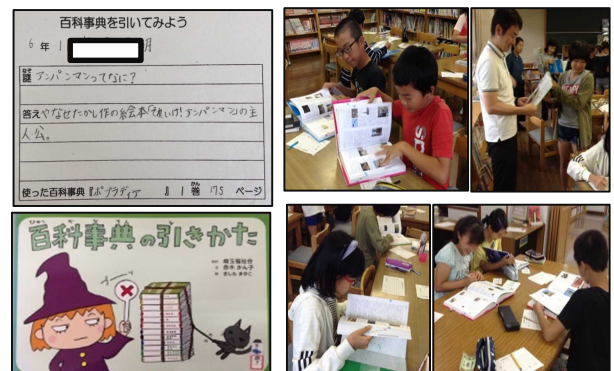
子どもたちに「何のために話し合いをさせるのか」「どういう話し合いが深い学びとなるのか」、そのための手段として「つなぎ言葉」を

どう浸透させていくかということに関して、授業研究や校内研修（国語科授業づくりの伝達）等で教職員協議を重ねてきた。しかし、実際の授業の場で「主体的・対話的で深い学び」となるような話し合い活動を意図的に仕組むまでに至っていない現状がある。このことから、再度全教員で共通理解を図り、どのようにすれば「つなぎ言葉」が児童に浸透していくかについて授業づくり部を中心に研究を進め、授業改善に努めていかなければならない。また、日常的な国語辞典の活用に関しても、来年度も継続して使用していくことで、語彙力の育成や学力の向上にもつながっていくことが期待できる。

	(1) 児童同士が「つなぎ言葉」を意識して使い、友達の見解に対して主体的にかかわっていますか？		(2) 各教科等で国語辞典を必要に応じて活用していますか？	
	関わっている	関わっていない	活用している	活用していない
R元年度（上旬）	33%	67%	60%	40%
R元年度（下旬）	50%	50%	80%	20%
差	+17P	-17P	+20P	-20P

表3 研究推進進捗状況調査

- 学校図書館を活用した学び方の学習を行うことで、他教科等で生かされる場面が多く見られた。学年に応じた図書館に関する授業や、12月から導入されたWindowsタブレットの使い方指導などを系統立てて継続的に実施していくことで、6年間を通じた学び方の学習が定着していくものだと考える。そのために、これからも各担任が学び方の学習を系統立てて実施し、各教科等の基盤となる情報活用能力の育成に努めていく必要がある。



（赤木かん子 作）

写真5 百科事典の学習